

抵抗を示すのは、しんどいけれど大切なこと

眞鍋由比

今年の10月にあった衆院選では当選した女性はわずか45人。全体の9.7%しかなく、前回の17年より0.4ポイント減りました。世界経済フォーラムが発表した男女格差を測る「ジェンダーギャップ指数」で、日本は153カ国中121位（19年発表）。この数字の通り、日本で女性として生きるって本当に厳しい。都立高校でも一部の医科大学でも女性は男性のはるか上に行く成績を出さないと入学させてもらえない。信じられないけれど、同じ仕事をしていても男性と同じ額が支払われない職種の方が多い。

『サフラジェット 平等を求めてたたかった女性たち』デイヴィッド・ロバーツ著 合同出版 2021

表紙も挿絵も美しいこの本はイギリスで男性と同じように選挙権をもてるよう、文字通り闘った女性たちの記録です。序文で映画『メリー・ポピンズ』の家の奥さんが、家庭を顧みず、選挙権運動のデモに夢中だったという描写についてふれられています。「あその奥様、自分とこの子どもの面倒も見ずにデモなんか行ってるのよ」と非常識な、意識高い系の人として描かれ、政治のことを考えるのは自分たちのすることではない、といった気持ちにさせられる。

でも、投票できなければ税金や法律の仕組みに意見を言うことができません。自分の生活に都合の悪いようにされてしまう。ただ男性と同じように選挙権を求めるだけなのに女性たちは投獄され、金属の痛いぐつわをかまされ、チューブで食事を流し込まれる拷問にあいます。（強制食事）

サフラジェットは女性投票権を求める人たちのこと。デモのときの警官の暴力から身を守るため、柔術（日本の古武道）を身につけたりしていました。

失敗もあればグループ内での裏切りも、おなじ女性なのに投票権などいらないという人たちもいました。第一次世界大戦のときは投票権獲得の運動は棚上げになりました（戦争反対のグループもありました）。

「言葉ではなく行動を Deeds Not Words」投票権を得るために郵便ポストを放火したり、ダウニング街10番地（首相官邸）の窓にレンガを投げて割ったりしたので、テロリスト呼ばわりされたこともありました。けれど人に向けての攻撃をしたことはありません。ダービーで国王の馬に轢かれてまで抗議したエミリー・ワイルディング・デイヴィソンは亡くなります。

さまざまな抵抗をへて約60年、イギリスではやっと女性が選挙権を持てるようになりました。巻末に各国で女性に参政権が与えられた年が載っています。日本は1945。2006年は現在の中3のみなさんの多くが生まれた年。やっとアラブ首長国連邦で女性に選挙権が与えられています。苦労して取得した選挙権、無駄にはしないでほしい。そして選挙に行かないと、自分たちの生活に都合の悪いように法律が変えられてしまいます。

サフラジェットのイメージカラーは緑Green 白White 紫Violet Give Women Votes. このイメージカラーでつくられたサフラジェット・ジュエリーなどもあります。美しく意見をアピールするジュエリー、少し憧れます。

サフラジェットを描いた映画『未来を花束にして』2015
キャリー・マリガン、ベン・ウィショー（007のQ）、
ヘレナ・ボナム・カーター、そしてメルル・ストリープが出演しています。ぜひ観てください。

『シャーロック 忌まわしき花嫁』や
Netflix『エノーラ・ホームズの事件簿』でもふれられています。

他人と違う意見をいう時、おとなげないとか、空気読めないとか馬鹿にされたり、集団で無視されたりするのが怖いし、つらい。でも、今のままでいいのか、いけないのか。今すぐには変えられなくても変えていかなくてはならないと信じることもあるなら少しずつアピールをしていきませんか？たぶん、そう思っている人がどこかにいます。自分の意見をあきらめないで、持ち続けてください。

